

第36回 防災カフェ in 高島 を開催しました。



水害から大切な命と財産を守るために

ゲスト：里深 好文 さん

(立命館大学 理工学部 環境都市工学科 教授)

日時：2018年11月14日(火) 18時~20時

場所：高島市役所 本庁舎新館 3階 会議室

ファシリテータ：深川 良一 さん

(立命館大学 理工学部 環境都市工学科 教授)

近年、局地的な豪雨は増加していて、毎年のように土砂災害や洪水災害が発生しています。どうしたら水災害から大切な命と財産を守れるのか、高島市の皆さんと一緒に考えました。

最近、日本には多くの災害が発生しています。豪雨、強風、雷、火事、高島市以北では雪による

災害もあります。また、琵琶湖西岸断層による地震の心配もあります。滋賀県には火山以外のすべての災害の可能性ががあります。全国的に見ると災害発生件数の一番多いのは間違いなく雨によるものです。多くの都市の排水能力として設定している時間 50mm 以上の降雨が 1 年間に観測される回数は最近 280 回と約 30 年前に比べ 50~60%増加しています。原因の一つの地球温暖化が今後も続くと、例えば台風では発生回数は減るが、個々の勢力が大きくなるというように気候が極端化していくことになります。

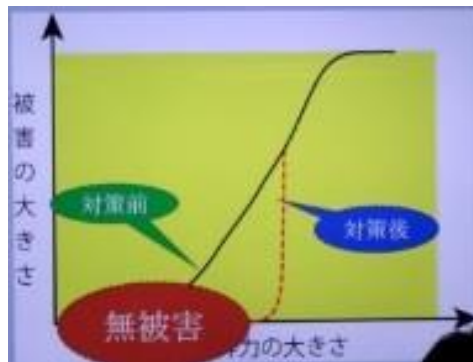
最近の水災害の例として、2018 年の西日本豪雨での倉敷市真備町の状況を説明していただきました。真備町では高島市にも多くある川底が私たちの生活の場より高い天井川の堤防が決壊して周辺の住宅が完全に破壊されました。ここでは以前から住宅地に降った大雨が排水されずに浸水する内水氾濫を何回も経験していて、対策として排水ポンプが整備されていたので人々は大丈夫だと思っていたようです。しかし、堤防が決壊する(外水氾濫)と川から多量の泥水が強い流れになり一気に襲うので内水氾濫用の排水ポンプは役に立ちません。災害後も細かい泥などが風に舞ったりして後片付けも困難な状況になります。天井川の周辺に住んでいる人は知っておいてほしいということでした。大規模な洪水を前に人間ができることはなく、唯一できるのは早目に逃げるということなのです。



ゲスト：里深 好文 さん

次に、「防災での『想定』を知ること」、「安心と安全は別物であることを知ること」、そして、「ソフト対策にも限界があることを知ること」についてのお話がありました。

「防災での『想定』を知ること」についてですが、私たちは堤防やダムなどの災害対策後はどんな雨でも被害を軽くできると思いがちです。そのため「想定外」の雨などという、防災に悪いイメージを持ってしまいます。しかし、費用などの関係から堤防をどこまでも高くできないので、「想定」しないと対策はできません。少量の雨は頻繁に降りますが、豪雨はめったにありません。時間 50mm の雨量程度では無被害ですが、稀に起きる「想定」を超える大雨が降って、水が堤防を越えると堤防がないのと同じような大きな被害が出ることとなります。このように『想定』は必要で、『想定外』のことは起きるということを私たちは理解しておく必要があるということでした。



想定内と想定外の関係

「安心と安全は別物であることを知ること」についてですが、『想定』の中で、人間の作るものに無制限のものはありえないということでしたが、実は、私たちは安全を求めているのではなく安心を求めています。倉敷市真備町の例では、排水ポンプで内水氾濫への対策がしてあることで安全だと考え、安心していたといえます。災害を避けるためには「堤防が決壊するかもしれない」というように、何かを疑いながら、日ごろから適度な危機感をもって生活することが大切で、このような防災の姿勢は訓練によってのみ磨かれるということでした。



ファシリテータ 深川 良一 さん

「ソフト対策にも限界があることを知ること」についてですが、「情報に従い避難したが何も起きずに無駄になった」とされると、避難情報を出す方は、情報の「空振り」を恐がり、出すのをためらう状況になってしまいます。でも、危機が迫ったと判断すれば避難情報は出さなければなりません。そこで、私たちが「空振り」ではなく、「素振り」と考える、つまり、無駄になったのではなく、いきなり災害が迫った過酷な環境の中での安全な避難はむずかしいので、少し軽い段階で避難の経験ができたと考えれば、出す方は、躊躇なく避難勧告や避難指示を出せるのではないかということでした。

避難には個々人の責任が大きく関わっています。私たちが、不安だと思った時が避難時です。雨も降る、雷もなる、ニュースでは大雨警報とか特別警報といっている、「まだ



休憩時間に質問カードに記入する皆さん

大丈夫だよね」などと、人はそれを打ち消す情報を一生懸命探して安心したがる生き物だと自覚する。自分が感じている恐怖、何となく危機が来ているんじゃないかという感覚を大事にして、何となく不安だなあと思った時、より安全だと思われる場所、方向に避難を始めることが何よりも大事だということでした。

参加者からは多くの質問がありました。その一部を紹介します。

問：災害に事前に備える大切さを他の人に伝える良い方法はありますか？

答：伝えることはそれを受ける側にとっても伝える側にとっても大事なことです。そして、「危ないかもしれないという時には逃げる」「自分で自分の身を守るための行動をすること」が社会全体の共通認識になる必要があります。西日本豪雨の時の話ですが、お母さんの住宅が崖下にあるので、離れて住んでいる息子さんが大雨のたびに「避難しろ」と言い、お母さんはそれまでに 19 回も避難していました。西日本豪雨の時に 20 回目の避難をしたところ崖が崩れ、お母さんは助かったということでした。それまでの積み重ねがあったから本当に危ないときにも逃げられたという事実を伝えてほしいです。2004 年の四国での豪雨災害のとき小学 4 年の女の子が集落の人々を救っています。何日か前に学校で「崖から石ころが出てきたら危ないですよ」と聞いていて、雨が降って石がコロコロ出てきたので、「これは危ない」と親に言い家族が避難を始めそれを見た周辺の人達も逃げた後、崩れたのですが、その集落からは死者は出ませんでした。倉敷市真備町ではたくさん亡くなりましたが、事前に避難して人的被害を出さなかった集落がいくつもあります。成功した事例をしっかり伝えれば、自然災害から身を守れる、簡単にあきらめてはいけないということが伝わると思います。それが社会全体の防災の総合力を上げることに繋がると考えます。

高齢者等の避難についてですが、普段から地域内の連携がないのに極限状態に近い災害の時にだけうまく連携して避難させることは大変難しいです。「ソフト対策にも限界があることを知ること」のところでも話した避難の「素振り」の経験があれば、地域社会の共助の限界がみんなに分かると思います。本当に危機が迫って避難するとき、共助の限界を瞬間に判断するのは無理ですから事前に自分たちのグループとしてのパワーの上限はどれくらいなのかというようなことを冷静に判断することをやっていただけたらと思います。

里深さん、深川さん、参加者のみなさん ありがとうございました。